

AIを配るだけで 終わらせない。 組織学習の実践チェックリスト

人とAIの仕事の結果を、次の仕事へ戻すための設計と採点表



この資料でできること

現状を10問で診断

候補業務を7条件で採点

4週間のPoCを設計

まず、組織の現在地を10問で診断

1

AIの利用目的が、部門の成果指標と結びついている

☐

2

AIへ渡す商品・顧客・業務ルールが整理されている

☐

3

AIの出力を人が確認する基準が明文化されている

☐

4

AIの成功例だけでなく、失敗と修正内容も残している

☐

5

個人のプロンプトや会話履歴をチームで再利用できる

☐

6

外部送信や重要更新の前に、人の承認が入る

☐

7

閲覧・下書き・更新・送信の権限を分けている

☐

8

AI利用回数ではなく、時間・品質・成果を測っている

☐

9

検証済みの知識を次の仕事へ戻す担当者がある

☐

10

同じ失敗の再発率を確認し、手順を更新している

☐

判定

0-3個: 個人利用段階 / 4-6個: 反復可能化段階 / 7-8個: チーム共有段階 / 9-10個: 成果学習段階

最初に任せる業務を7条件で採点

最大価値の業務ではなく、学習ループを一周できる業務を選びます。各項目を1-5点で採点してください。

反復性

週次・日次・案件ごとに繰り返される

1

2

3

4

5

文脈の入手性

必要なデータを適切に利用できる

1

2

3

4

5

評価可能性

良い出力と悪い出力を比較できる

1

2

3

4

5

可逆性

誤りがあっても停止・修正・復元できる

1

2

3

4

5

権限の限定性

閲覧や下書きから始められる

1

2

3

4

5

経済性

削減時間が成果向上を追跡できる

1

2

3

4

5

学習価値

人の修正と結果を次回へ再利用できる

1

2

3

4

5

採用基準

合計25点以上を候補にします。ただし、評価可能性・可逆性・権限の限定性のいずれかが2点以下なら、初期対象から外します。

組織学習につなげる4つの設計

1 文脈を整える

商品、顧客、過去事例、禁止事項、判断基準をAIへ渡せる状態にする。

2 成果と失敗を知識化

会話を保存するのではなく、再利用価値のある知識候補を抽出し、人が確認する。

3 評価基準を持つ

自然な文章かではなく、修正率、返信、商談進行、受注など業務成果で評価する。

4 次の仕事へ再配布

検証済みの知識を、人とAI Crewが次の案件で使える状態へ戻す。

Knowledge Loopを一周させる



重要な前提

AIが勝手に学習するものではありません。何を残し、誰が確認し、どこへ配り、何を成果とするかを人が設計します。

4週間でPoCを終わらせる

WEEK 1

現状を記録

入力、出力、例外、禁止事項、現行工数を記録する。

WEEK 2

過去データで検証

AI出力の採用・修正・棄却を分類し、基準を揃える。

WEEK 3

限定案件で運用

送信や更新の前に人が確認し、事故を止められるか確かめる。

WEEK 4

継続判断

時間、品質、成果、事故、学習価値を比較する。

合格条件

AIが動いたことではなく、工数が減ったか、品質が維持・向上したか、失敗を検知できたか、修正を次回へ戻せたかで判断します。

利用回数ではなく、4層で測る

速度

人の作業時間 / 処理待ち時間 / 1件あたり工数

現状: _____ 4週間後: _____ 差分: _____

品質

修正率 / 差し戻し率 / 根拠不足 / 禁止事項違反

現状: _____ 4週間後: _____ 差分: _____

成果

返信 / 商談進行 / 受注 / 解約抑止 / 問い合わせ

現状: _____ 4週間後: _____ 差分: _____

学習

知識の再利用数 / 更新率 / 同じ失敗の再発率

現状: _____ 4週間後: _____ 差分: _____

PVや生成数が増えても、人の修正時間と誤情報リスクが増えれば成功ではありません。速度・品質・成果・学習を同時に見ます。

次の一步を決める

対象部門

最初に任せる候補業務

改善したい成果指標

人が承認する地点

4週間後の継続条件

BrewUpと一緒に、最初の業務を設計する

AI Crewの役割、権限、評価基準、Knowledge Loopを、現在の業務から整理します。

<https://brewm.jp/contact/>

参考資料

- Microsoft: 2026 Work Trend Index
- NIST: AI Risk Management Framework
- OpenAI: A practical guide to building agents
- Anthropic: Building Effective AI Agents / Effective context engineering

本資料は一般的な設計・検討用です。法務、情報セキュリティ、個人情報、労務に関わる実装は、社内担当者または専門家に確認してください。